

子どもの通学合宿体験と自尊感情の関係

相戸, 晴子
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/19987>

出版情報 : 生活体験学習研究. 10, pp.1-10, 2010-01-20. 日本生活体験学習学会
バージョン :
権利関係 :

子どもの通学合宿体験と自尊感情の関係

相 戸 晴 子*

The Relation between Tûgaku Gasshuku Experience of the Children and Their Self-Esteem

Aito Haruko*

要旨 2004～2005年に実施した庄内中学校1年生の調査の分析結果では、自尊感情の高い群と低い群の層が見られ、その日常生活状況に違いがあることがわかった。そこで本稿では、庄内生活体験学校の20年以上に渡る通学合宿の実践の蓄積において、自尊感情の高位群、低位群が通学合宿の参加の有無や経験回数によって、日常生活状況に違いは見られるのかをあきらかにしていった。そこでは、参加経験が増すことによって、人との関係性や基本的な生活習慣、仕事や生活スキルが着実に獲得されている道筋を見ることができた。ここでは、特筆すべき点として、自尊感情下位群においてもその獲得傾向をとらえることができた。これらの結果から、生活体験学校20年に渡る通学合宿の意義の一端をあきらかにできたと考える。

キーワード 通学合宿 自尊感情 生活スキル 基本的な生活習慣の確立 関係性

はじめに～子どもの生活課題と問題の所在～

子どもを取り巻く生活環境は、時代の急激な流れの中で大きく変化している。テレビ・ゲーム・携帯・インターネットに見られるメディアツールの増大、調理や洗濯・掃除など日常生活便利用品の普及による生活労働体験の欠落、食や遊びの個人化にみる意識の変容など、子どもの「生活破壊¹⁾」が進行している状況がある。

その異変に最初に気がついたのは、子どもたちの身体面に見られる現象だった。正木ら²⁾の1978年「からだのおかしさ」調査では、40年以上に渡って高度経済成長期以降の子どもの生活環境の変化が、子どものからだの不調や発達不全を複合的に引き起こしているとの指摘がなされてきた。また、子どもの生活に着目した矢田貝ら³⁾によって、生活習慣の乱れや生活体験の不足が子どもの感覚（主に触覚、嗅覚、味覚）機能を低下させているとの報告がなされてきた。また世界で最もテレビやゲームのメディ

ア接触が長いと指摘される日本の子どもたちの状況に対して、NPO 法人子どもとメディアでは、「人類初の人体実験にさらされている⁴⁾」との警鐘を鳴らしている。

近年では、子どもの生活変容による身体面への影響だけでなく精神面への影響の深刻さが懸念されている。児童精神科医の古荘⁵⁾は、2007年2月に報告されたユニセフの「子どもの幸福度調査」の結果や現場で目の当たりにする子どもの実態から、睡眠を奪われ心の居場所をなくした日本の子どもたちが、自信喪失や自尊感情の低下に陥っていると指摘をしている。同様の見解として、2009年に報告された福岡県の子どもの自尊感情調査⁶⁾においても、「外遊びや早く就寝する子ども」は自尊感情が高いという結果が現れていた。しかし、日本の子どもたちの自尊感情の低さは、生活体験の不足によって引き起こされているという一つの要因が指摘されているにも関わらず、生活体験が子どもたちの自尊感情にどのよ

*連絡・別刷請求先

九州大学人間環境学府社会教育研究室（〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目19-1）

tel/fax 092-642-3128 E-mail aito-fine@w4.dion.ne.jp

うな影響を与えているのかをとらえていく研究はこれまでなされてこなかった。そこで、本稿では、生活体験を意識的に行うことによって自尊感情に与える影響があるのかという研究課題を設定し、実態解明を試みた。

1. 「通学合宿」におけるこれまでの研究

子どもの生活体験を支える取り組みの一つのアプローチに「通学合宿」実践⁷⁾がある。1990年以降、静岡、鹿児島、福岡、大分、福井などの自治体を絡めて実践され、全国的な広がりを見せてきた取り組みである。学校に通いながら、仲間と共に集団生活を行い、日常生活の営みのほとんどを子どもたち自身で行うという通学合宿である。この通学合宿の専用施設をいち早く設置したのが庄内町立(現・飯塚市立)生活体験学校⁸⁾である。ここでは、地域の住民と行政が一体となって、20年以上に渡って庄内の子どもたちの生活体験を支える「通学合宿」に取り組んでいる。また、この「通学合宿」実践の足跡を残す資料⁹⁾の蓄積もある。

これまでの研究においてあきらかにされてきたことは、生活体験学習とは、生活構造の変貌(南里、2001)の時代の中で、子どもの「開かれた身体」形成における意義(猪山、2002¹⁰⁾)や、子どもの生活文化をつくりだす意味(末崎、2002¹¹⁾)があること。そして、原体験をもとに類型された生活体験学習の内容(玉井、2001¹²⁾)を踏まえた、生活体験学習プログラムを実践していくことによって、基本的な生活習慣を確立する生活体験と学力との関係、また自尊感情との関係が(永田・正平2006¹³⁾、永田・相戸・正平2008¹⁴⁾)一定程度とらえられてきた。

一方、生活スキルの獲得と人格形成だけでなく、「収奪」と「過剰供給」の複合的影響の全体構造を読み解きながら実践構築をしなければ、子どもの生活課題に近づくことはできない(上野・丸野坂、2004¹⁵⁾)という実践課題への指摘や、地域に参画し人間・社会関係性を形成しながら「身体 協同生活体験」を学習していくこと(猪山、2001¹⁶⁾、2002)や、子どもが「人間関係を子ども自身が創っていく」主体的体験学習の環境を創る必要性(井上¹⁷⁾、2005)がアプローチの際に不可欠であるとの提起がなされてきた。

そこで本稿では、子どもが主体的に参加する生活体験の実践を創っていく上でも、さらに生活体験と自尊感情についての研究をすすめ、その効果をあきらかにしていく必要があると考え、2004～2005年に実施した庄内中学校1年生の調査の分析結果について、さらに探求していく研究を試みることにした。ここでは、自尊感情の結果が通学合宿の有無や回数の違いによって違いはあるのか。また、自尊感情の高い、または低いと回答した生徒が、通学合宿に参加することによって何らかの学習効果を及ぼしているのかをとらえていった。以下、調査概要と分析結果を記す。

2. 調査の概要

2004～2005年、旧庄内町の中学1年生を対象に、「生活に関するアンケート(子どもの日常生活と生活体験に関する調査)」を実施した。この調査は、正平辰男氏によって作成され、以下、表1にある29の問いから構成されている。調査の方法は、中学校の全面的な協力により、学級活動の時間にアンケートを配布し、その場で記入し回収する留め置き法によって実施された。回収数は、2004年が89名、2005年が101名の併せて190人となり、回収率は97.4%であった。

3. 自尊感情から見た中学生の生活状況

調査で着目したのは、自尊感情について尋ねた問い「自分は何をやってもダメ人間だと感じることもあるか(問25)」の結果である。「よくある」と答えた生徒が全体の1割強を占めていたからである。

そもそも「自尊感情」という言葉は、Self-Esteemの日本語訳として主に心理学領域で用いられている。一般には「自尊心」という言葉の意味が一番近いとされ、広辞苑では、「自尊の気持ち。特に、自分の尊厳を意識・主張して、他人の干渉を排除しようとする心理・態度。プライド。」と説明されている。近年、国内外の調査¹⁸⁾においても日本の子どもたちの自尊心の低さを指摘¹⁹⁾されるようになり、心理のみならず教育や医療の現場においても「自尊感情」の向上に向けた取り組みの重要性が叫ばれてきている。

そこで、今回の調査項目「自分をダメ人間と思う

表1 生活に関するアンケート (中学生用)

問1 お互いに理解し、心をうちあけて話せる「親友」がいますか。	問17 一日平均どれくらいゲームをしていますか。(平日)
問2 ふだん、年上や年下の友達と遊ぶことがありますか。	問18 休日どのようにすごしていますか。
問3 朝ご飯や夕ご飯を食べたくないことがありますか。	問19 近所の人に会ったらあいさつしていますか。
問4 朝食を食べていますか。	問20 掃除当番やクラスで決められた仕事をどのようにしていますか。
問5 家で決まった手伝いをしていますか。	問21 イライラしたりむかつくことがありますか。
問6 リンゴの皮をナイフ(包丁)でむくことができますか?	問22 今もっとも悩んでいること、困っていることを順番に選んで下さい。
問7 鍋やフライパンを使って、かんたんな料理ができますか。	問23 大きくなったらやってみたいと思う夢はありますか。
問8 放課後何か習い事をしていますか。	問24 最近「明日からもう学校に行きたくない」と思うことがありますか。
問9 平日の夜は何時頃寝ていますか。	問25 自分は何をやってもダメな人間だと感じることはありませんか。
問10 夜よく眠れないことがありますか。	問26 生きているのがイヤになると感じることはありませんか。
問11 授業中眠たくなることがありますか。	問27 とても疲れたと思うことがありますか。
問12 平日の朝は何時頃起きていますか。	問28 何もしたくないと思うことがありますか。
問13 毎朝声を掛けられて起きていますか。	問29 あなたは通学合宿に参加したことがありますか。
問14 1ヶ月に平均何冊くらいの本や雑誌(マンガ以外の本)を読みますか。	
問15 塾や家庭教師以外で平日どれくらい家庭で勉強していますか。	
問16 一日平均どれくらいテレビを見ていますか。(平日)	

この資料は、正平氏のアンケートの問いの概要を相戸が一覧にしたもの。

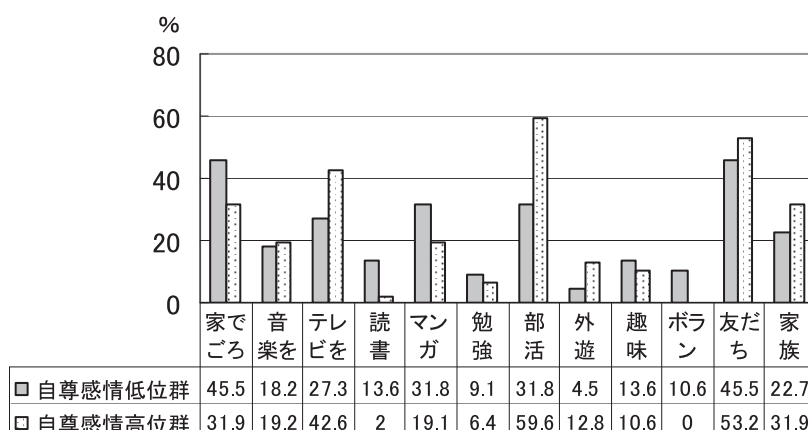


図1 自尊感情の高位群と低位群の休日の過ごし方

ことがあるか」という質問に対し、「よくある」と答えた11.6%を自尊感情の低位群として、また「まったくない」を選択した24.7%を高位群と位置づけ、中学生の基本的な生活習慣や意識、また生活体験に違いがあるかどうかを見ていくこととした。

ただし、ここで用いる自尊感情の低位群、高位群は、低ければ悪い、高ければいいという評価のための区別ではない。それぞれの子どもが自分を評価した自尊感情の結果については、メリットもデメリットも含まれているという前提で生活をとらえるための一つの分析基軸としたものである。

3-1 関係性

まず友だちや家族との関係性はどうか。親友(問1)が「いつもいる」との設問で、「自尊感情低位群(以下、低位群)」は54.5%、「自尊感情高位群(以下、高位群)」は80.9%であり、自尊感情が低い群は親友の存在が2人に1人しか存在していなかった。一方、異年齢の友だち(問2)と遊ぶことが「よくある」人の割合は、低位群が22.7%、高位群が25.5%とほとんど差は見られず、いずれも低い結果であった。休日の過ごし方(問18)について低位群が高位群より高い割合を示した項目は、「家でござろろしている(45.5%)」「マンガや雑誌を読

む (31.8%)」「読書 (13.6%)」などが上位を占め、人との接点が少なく家の中で1人過ごす割合が多く見られていた。一方、高位群は、「部活 (59.6%)」「友だちと外出 (53.2%)」「テレビやゲーム (42.6%)」「家族との団らんや外出 (31.9%)」など、全体を通して人との関係の中で休日を過ごしている割合が高かった (図1)。学校に行きたくないこと (問24) が「よくある」を選択した割合は、低位群が36.4%、「高位群」では8.5%となり、学校生活が自尊感情の高・低に大きく影響を及ぼしていることがわかった。

それらの結果から中学生の関係性を総合的にとらえていくと、全体的に異年齢交流は減り、学校における同年齢集団の関係性に留まりがち傾向が見られた。学校に行きたくないと思う割合が高い低位群では、「学校生活での対人関係がうまくいかない」「親友ができない」「自尊感情が下がる」という悪循環に陥っているケースも考えられる。

3 - 2 基本的生活習慣

(1) 食

朝食摂取 (問4) については、全体の9割近くの子どもたちが朝食をきちんと食べていた。しかし、両者の1割強の生徒に「ときどき食べる」「食べていない」という状況が見られていたことは見過ごせない結果であった。次に、ご飯を食べたくないと思うこと (問3) があるかという質問について「よくある」と回答した割合は、低位群9.1%、高位群2.1%と4倍以上のひらきがあった。食に関する結果から自尊感情を考えた場合、食べたか食べなかったかというよりも、食べたくないという「意欲の低下」に陥っていることこそが問題であるといえる。食事の内容、時間、そして食を一緒に楽しむ家族や仲間存在を大切に食卓づくりを行っていく必要がある。

(2) 睡眠

続いて「睡眠」に関する5つの質問 就寝時刻 (問9)、起床時刻 (問12)、よく眠れないこと (問10)、授業中眠たくなること (問11)、声を掛けられて起きること (問13) では、全体的に低位群の乱れが目立っていた。就寝時刻を見ると、「午後10～

11時代に寝る」高位群は72.4%であったが、低位群では45.4%に留まり、逆に「夜中12時以降」に就寝する割合が31.8%にのぼり、自尊感情低位群の3人に1人が日常的に夜更かしをしている状況があった。一方、起床時間については、「午前6時半～7時半」に起きる高位群は89.4%、低位群は77.3%と約8～9割を占めているものの、低位群の内訳では、「午前6時以前」に起床する13.6%や「午前8時以降」に9.0%が存在しているなど全体の約2割に、極端に早かったり、極端に遅かったりする特徴が見られていた。これら3つの睡眠に関する問いの低位群の割合は、「夜眠れないことがよくある」31.8%、「授業中眠たくなることがよくある」45.5%、「声掛けによる起床することがよくある」72.7%と、高位群に比べて1.5～5倍の高い問題行動の割合を示していた。ここでは、睡眠の乱れによって昼間の活動に支障をきたしている状況を見ることができる。

(3) 家庭学習

塾や家庭教師を除いた家庭での学習時間については、「まったくしていない」「30分程度」と答えた割合が、低位群では63.7%、高位群では55.3%にのぼっていた。いずれも半数以上の生徒が、自宅での学習が習慣化されていないことがわかる。次に1～3時間学習している割合では、高位群が44.7%、低位群では27.2%と大きく差が見られている。一方、低位群の中には、4時間以上学習をしている生徒が1割近くみられていた。これは、家庭での学習時間が、極端に大きいことも自尊感情低位群の要因になっているケースが考えられる。

(4) メディア接触

最も現代的な子どもの生活課題であると言われていた「メディア接触」についての結果はどうだろうか。庄内の子どもたちが、テレビを平日平均3時間以上視聴する割合は、低位群72.8%、高位群66.0%にのぼった。また、ゲームを平日平均1時間以上する割合の低位群33.5%、高位群49.0%を考えると、一日4時間以上、日々メディアに接触している子ども像が浮かび上がる。自尊感情の高位群・低位群に関わらず、子どもたちの家庭生活に深くメディアが浸透している現実を受け止め、その危うさを周囲の

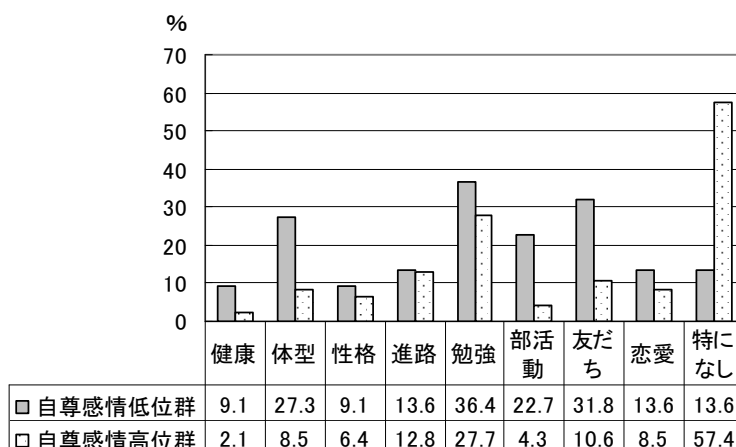


図2 自尊感情の低位群・高位群の困っていることや悩んでいること

親や大人がしっかりと認識していく必要がある。

3 - 3 悩んでいること

本調査の結果で、自尊感情の高低に最も大きな影響を及ぼしていると考えられるのは、「困っていることや悩んでいること」ではないだろうか。「特になし」と答えたのは、低位群の13.6%に対し、高位群では57.4%であった。逆から考えると「悩みや困っていることがある」割合は、低位群で86.4%、高位群で42.6%という倍差がついていることになる。

悩みの内訳を見てみると、低位群で20%以上選択された悩みとは、「勉強」36.4%、「友だち」31.8%、「体型」27.3%、「部活動」22.7%の4項目である。高校受験に対する「勉強」へのプレッシャー、「友だち」との人間関係の悩み、成長に伴う「体型」の変化や容姿に関する悩み、また「部活動」での悩み、思春期特有の悩みが大きいほど、自尊感情が低いという特徴が見られる。ちなみに、高位群の20%以上の割合の悩みは、「勉強」の27.7%のみである(図2)。

3 - 4 仕事や生活スキル

(1) 仕事 手伝いや役割

自尊感情の高低により、手伝い(問5)や学校での掃除やクラスでの役割(問20)、また調理の技能に差はあるのだろうか。低位群が「手伝いをいつもする」割合は、高位群に15%以上差を付け36.4%となった。また、掃除やクラスでの役割についても「まじめに責任を持ってする」が、高位群40.4%、低位群50.0%となり、手伝いや役割の仕事への関わりは、自尊感情の低位群が10~15%高かった。

(2) 生活スキル 包丁使いや調理

続いて、リンゴの皮むきができる割合は、高位群38.3%、下位群54.5%を示していた。下位群の2人に1人以上が包丁を使ってリンゴをむくスキルを身につけていた。調理についても、大いにできると答えた生徒は、低位群55.0%、高位群31.9%にのぼり、低位群の調理のスキルは20%以上差をつけてできることがわかった。

本調査の仕事や生活スキルにおいては、他の問いに比べて「できる」割合が高いという特徴が見られた。特に低位群のできる割合が高いことも特筆すべき結果である。生活体験学校のある庄内に育った子どもたちだからこそ備わった力の可能性もある。あとの分析で、通学合宿の体験回数毎の分析でそこをあきらかにしていきたい。

4. 通学合宿体験にみる子どもの生活体験学習

自尊感情の低位群と高位群に分けて生活状況を見てきたところ、いずれにおいても一定の生活スキルが顕著に身につけている項目がいくつかあった。それは、生活体験学校のある庄内の子どもだからこそ身につけてきた項目ではないだろうか。ここでは、自尊感情の高低と通学合宿体験の有無や回数によって、生活スキルの獲得がどのように違っているのかをみていくこととする。

4 - 1 通学合宿体験と関係性

まず親友がいる(問1)割合を、自尊感情の高低と通学合宿参加回数でクロス集計してみた。図3のように自尊感情低位群・高位群いずれも参加なしの

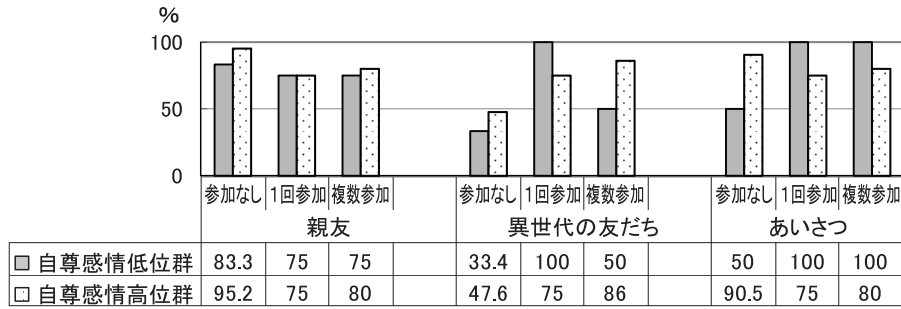


図3 自尊感情の低位群と高位群で通学合宿体験と親友や異世代の友だちのいる割合とあいさつをする割合

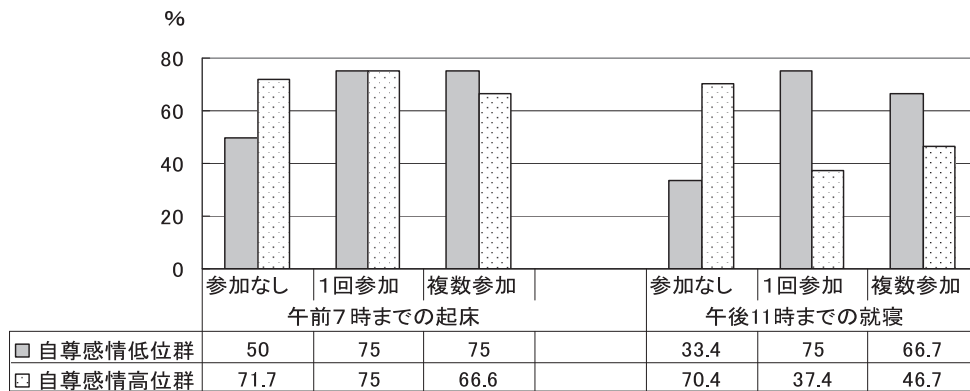


図4 自尊感情の低位群と高位群の通学合宿参加にみる理想的な起床と就寝の割合

割合が高い結果となったが、参加した人を見ると1回、そして複数参加と微増傾向も見られた。また異世代の友だちと遊ぶことが「よくある」「ときどきある」の割合では、「参加なし」「1回参加」「複数参加」の順に、低位群では33.4%、100%、50.0%、高位群では47.6%、75.0%、86%となり、通学合宿体験の回数が多くなればなるほど概ね異世代の関係性が右肩上がりになっている傾向をとらえることができた。

さらに、あいさつについても、特に自尊感情低位群においては、通学合宿体験があることによってすべての子どもたちにあいさつ習慣がついている結果を見ることができた(図3)。

友だちやあいさつの全体的な傾向として、通学合宿参加回数とともに、概ね豊かな人間関係が育まれているということをとらえることができた。

4-2 通学合宿体験と睡眠を中心とした基本的な生活習慣

基本的な生活習慣の中で、ここでは睡眠について分析を行った。通学合宿体験がもたらす理想的な起床と就寝についてあらわした図4によると、特に自尊

感情低位群において、通学合宿体験とともに、朝は7時までに起床する割合、夜は11時までに就寝する割合が概ね増加傾向にあることがあきらかになった。これは、特に自尊感情が低い子どもたちが、通学合宿に参加して自ら基本的な生活習慣を改善していく経過を示す結果であり、通学合宿の非常に大きな成果を出している項目だといえる。メディア接触時間の多い子どもたちの課題へもアプローチできる有効なプログラムであることが実証された。

さらに、その他睡眠に関する結果を通学合宿体験との分析によっても、概ね通学合宿体験の複数参加が睡眠の改善傾向を示す結果を示していた。特に、自尊感情低位群の「授業中眠たくない」割合の着実な増加傾向や自尊感情高位群の「自分で起きる」割合の増加は通学合宿体験によって獲得される重要な生活習慣であった(図5)。

4-3 通学合宿とネガティブな意識について

図6では、問21、24、26、27、28の6つの項目について、ネガティブな考え方をしていない割合について調べてみた。自尊感情高位群に関しては、「イライラやむかつくことはない」は「学校に行きたく

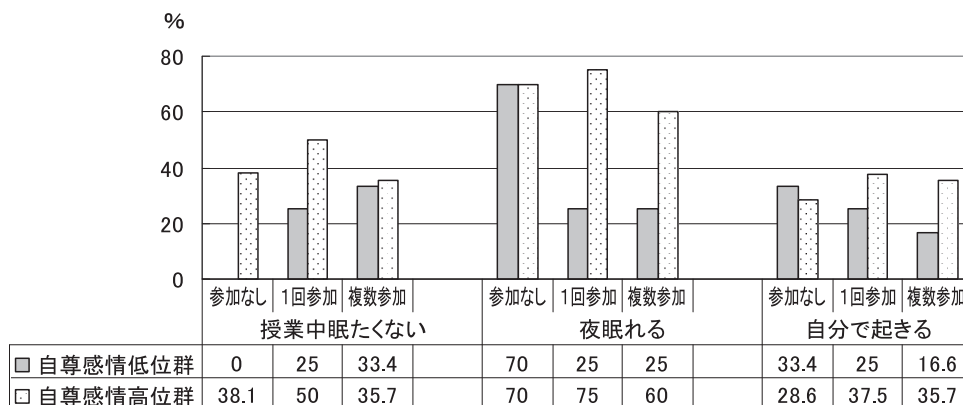


図5 自尊感情低位群と高位群の通学合宿参加にみる睡眠に関する割合

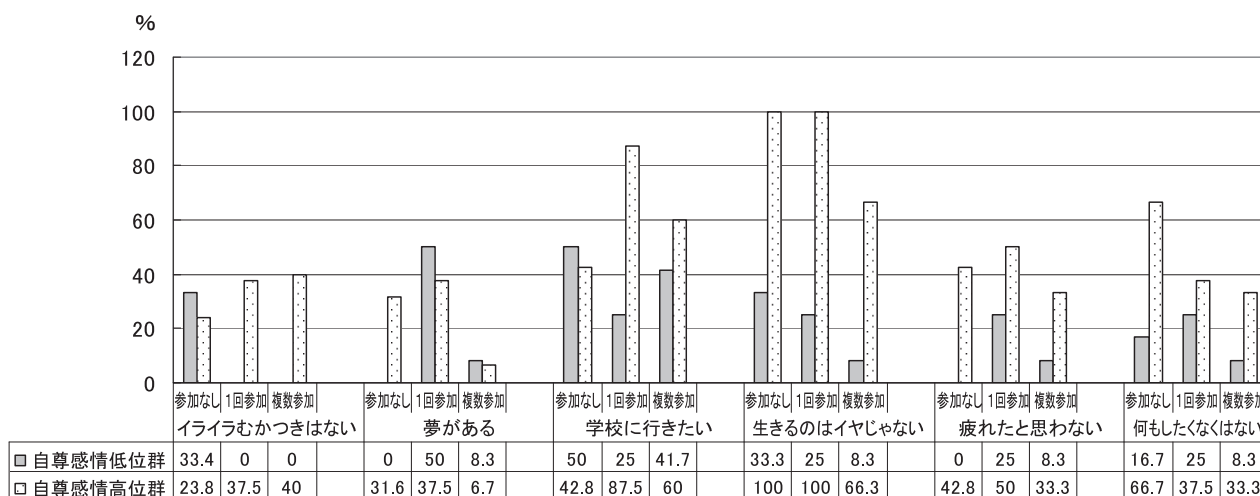


図6 自尊感情の低位群と高位群の通学合宿体験とネガティブな意識のない割合

ないとは思わない」の項目については、通学合宿体験が増えることに平行して、概ねプラス思考になる傾向が見られていた。しかし、その他の4つの項目では、プラスイメージとマイナスイメージが入り乱れている状態で、体験してマイナスに転じてしまう項目もあった。しかし、ここで考えておきたいのは、前節で見ていった「悩んでいること」が、必ずしも体験や経験で獲得してすぐに解決するものだけではなかったということである。特に多かった思春期特有の「体型」に対する悩みに対するネガティブな側面を差し引いた上で、この数値をとらえていく必要があるだろう。

4 - 4 通学合宿体験と仕事や生活スキル

(1) 通学合宿体験と仕事 手伝いや役割

最後に、通学合宿と仕事という視点から分析を行っていった。そこでは、大変顕著な結果をとらえることができた。ここでの仕事は、家で「手伝い」をし

ているかどうかと「掃除やクラスの仕事を責任もってやっているかどうかであった。両方の項目において、概ね右肩上がりの結果を得ることができた。特に自尊感情低位群においては、参加無し群と参加あり群では2～3倍の伸びを見ることができていた(図7)。これは、まさしく通学合宿で体験したからこそ、獲得できた力だといえるだろう。中学生にとっては、手伝いや掃除やクラスの仕事は、一つの行為で終わっているかもしれないが、成人した時の社会的労働の基礎を獲得しているといえよう。

(2) 通学合宿体験と生活スキル 包丁使いや調理

さらに顕著な結果をもたらしたのは、「りんごの皮むきができる」や「調理ができる」力の獲得である。自尊感情低位群、高位群、いずれの場合概ねも右肩上がりの結果となったが、特に自尊感情低位群では、参加なし群では半数以下だったスキルが、1回から複数回参加することによって、75～83%の子

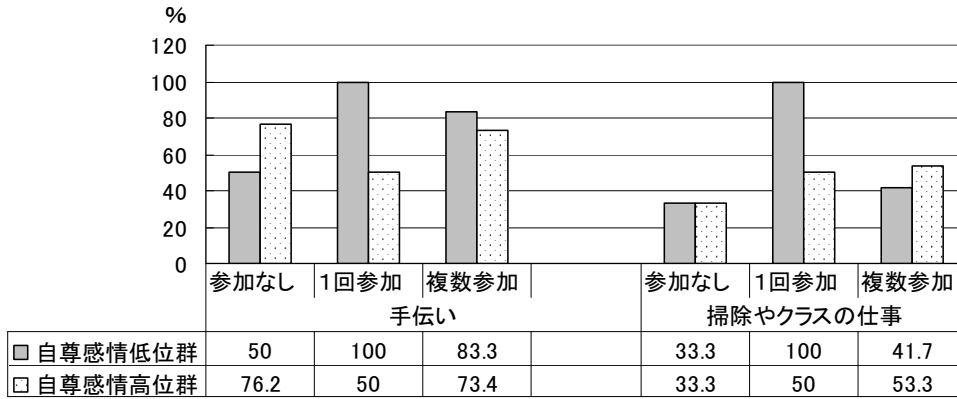


図7 自尊感情低位群と高位群の通学合宿参加にみる手伝いをする割合と掃除やクラスの仕事を責任もってやる割合

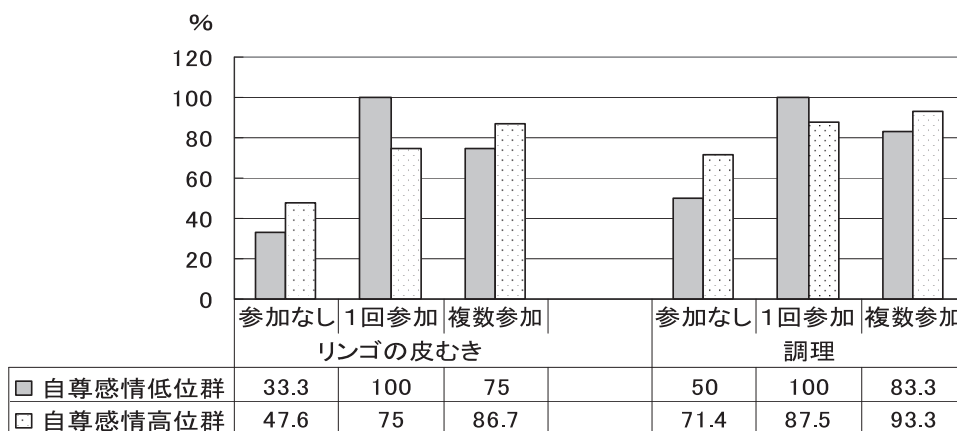


図8 自尊感情低位群と高位群の通学合宿体験にみるリンゴの皮むきと調理ができる割合

どもたちにおいて、そのスキルが獲得されているという結果となった(図8)。

5. 子どもの自尊感情を育む生活体験学習の可能性

通学合宿体験では、最も顕著な成果を出していたのは、手伝いや掃除、クラスの役割といった「仕事や役割に取り組む力=生活スキルの獲得」の向上である。ここでは、自尊感情が低くても高くても、体験やその回数を重ねることによってスキルや自信を高めている筋道をしっかりと確認することができた。

そして、基本的な生活習慣についても通学合宿体験との比例した関係を見ることができた。本調査では、睡眠に焦点化した分析に留まったが、そこからでも体験を重ねることによる、「基本的な生活習慣の確立」という筋道を確認することができた。中でも、自尊感情低位群の就寝時間が回数を経ていくたびに、理想的な生活習慣を確立していく傾向は特筆すべき点である。

最後は、「人と関係し合う力=信頼関係の構築」

の向上である。通学合宿に参加していく毎に、親友の存在を確かなものにし、異世代の友だちと遊ぶ関係を広げ、またあいさつできる力を確実に獲得していることをとらえることができた。そこでは、共同生活を行っていったからこそ見えてくる、生活をともにする仲間との本音のつき合いやぶつかり合い、また関係の広がりや深まりなのであろう。人との関係性ほど、教科書や知識で理解できないものはない。距離の取り方、つき合い方など、身体全体で育んできた力なのである。

以上のように、今回の調査によって、庄内の中学生の生活状況を把握していく中で、子どもたちが獲得してきた3つの力「仕事や役割に取り組む力=生活スキルの獲得」「基本的な生活習慣の確立」「人と関係し合う力=信頼関係の構築」が通学合宿体験によって育まれている側面をあきらかにすることができた。図9の概念図では、通学合宿を体験したことにより、生活スキルを獲得する場を得て、生きていくために必要な技能を手につけ、そして生活スキ

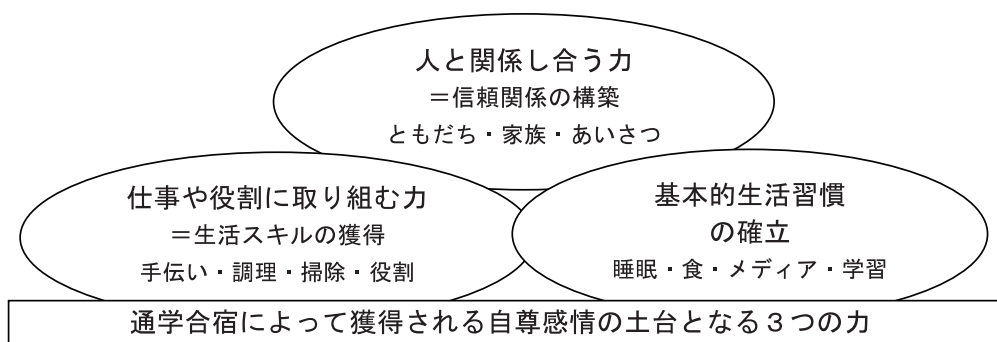


図9 通学合宿体験にみる自尊感情と生活体験の関係構造

ルの獲得は自身の「基本的な生活習慣の確立」を見直す意識を育み、それら自信や身体が育まれる中で信頼関係を基盤とした「人と関係し合う力」を獲得するという、自尊感情の土台の関係構造を表している。

以上の結果から、自尊感情と生活体験の関係に見る通学合宿の実践についての考察を行うと、通学合宿を経験したからといって自尊感情が高くなるとは一概には言えなかったが、生活体験学習である通学合宿への経験を継続していくことによって、自尊感情低位群や高位群いずれにおいても、子どもの生活スキルの獲得や基本的な生活習慣、また人と関係し合う力において効果的なプログラムであることが確認された。また特筆すべき点として、自尊感情低位群において特に顕著な成果が現れていたことも、実践の大きな意義を示すものであろう。

今回の報告では、通学合宿体験と自尊感の間に一定の関係があることが示唆された。しかし、サンプル数が限られており、断定的に結論づけるまでには至っていない。したがって、今後は、他の通学合宿についても調べ、同様の結果が得られるか否か検討することが課題である。

(注)

- 1) 瀧井宏臣『こどもたちのライフハザード』岩波書店、2004年。
- 2) 正木健雄編『ピオタ叢書 2 子どものからだは蝕まれている』柏樹社、1990年。また、『月刊社会教育 NO.623』2007年7月号には、「子どものいのち輝く生活体験」という特集テーマが組まれ、正木健雄などによる子どもの現状報告や実践紹介がなされていた。
- 3) 矢田貝公昭『子どもの生活習慣と生活体験の研究 教育臨床学入門』一藝社、2009年。
- 4) NPO 法人子どもとメディア「DVD 子どもが危ない! ~“メディア漬け”が子どもを蝕む~」2006

- 5) 古荘純一『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか 児童精神科医の現場報告』2009年、光文社新書。
- 6) 福岡県「自尊感情調査」「生活実態調査」青少年アンビシャス推進室、2008~2009年。
- 7) 正平辰男「通学合宿の今、県単位の沿革と概況」生活体験学習研究 Vol.3、日本生活体験学習学会、2003年、45-55頁。
- 8) 正平辰男「福岡県庄内町『生活体験学校』の施設と運営」生活体験学習研究 Vol.1、日本生活体験学習学会、2001年、49-58頁。
- 9) 横山正幸・猪山勝利・正平辰男『生活体験学習入門 福岡県・庄内町のこころみ』北大路書房、1995年。庄内町福祉の里づくり推進協議会編『生活体験学校の日々 福岡県庄内町のこころみ』1998年、正平辰男『通学合宿・生活体験の勧め』あいり出版、2005年などに、生活体験プログラムの内容や子どもたちの感想記録が記されている。
- 10) 猪山勝利「こどもの身体形成と生活体験 社会的身体形成を中心として」、生活体験学習研究 Vol.2、日本生活体験学習学会、2002年、1-7頁。
- 11) 末崎雅美「こどもの生活文化をつくりだす生活体験学習の今日的意義」、生活体験学習研究 Vol.2、日本生活体験学習学会、2002年、15-23頁。
- 12) 玉井康之「生活体験学習の基本的類型と教育効果」、生活体験学習研究 Vol.1、日本生活体験学習学会、2001年、19-27頁。
- 13) 永田誠・正平辰男「子どもの日常生活における生活体験と学力に関する研究(その1)」、生活体験学習研究 Vol.6、日本生活体験学習学会、2006年、1-13頁。
- 14) 永田誠・相戸晴子・正平辰男「子どもの日常生活における生活体験と学力に関する研究(その2)」、生活体験学習研究 Vol.8、日本生活体験学習学会、2008年、47-61頁。
- 15) 上野景三・九野坂明彦「生活体験学習の実践と理論の統合にむけて」、生活体験学習 Vol.4、日本生活体験学習学会、2004年、1-17頁。
- 16) 猪山勝利「こどもの生活体験学習の現代的構成に関する研究」、生活体験学習研究 Vol.1、日本生活体験学習学会、2001年、3-8頁。
- 17) 井上豊久「子どもの生活体験と心身の主体的発達に関

する総合的研究」、生活体験学習 Vol.5、日本生活体験学習学会、1-14頁。

18) 例えば、世界規模では2007年2月にユニセフによって実施された世界の先進国の「子どもたちの幸福度調査結

果」、福岡県青少年アンビシャス運動推進室が2008～2009年に小中学生1万人以上に実施した「平成20年度自尊感情調査」などがある。

19) 前掲5。